世間解　第四一七号
令和四年十一月
発行　西法寺

念仏もうさるべし

ーご法事ー

十一月であります。皆さまには変わることのないご本願のお育てとおはたらきの中「なんまんだぶ、なんまんだぶ…」とお念仏ご相続のことと存じます。

来年は父である、西法寺前住職・順育院釋清観の三十三回忌になります。“なんかあっと云う間やったなあ”と思います。

ご法事というお仏事

ご法事という形で先だたれた方をお偲びするお仏事があります。われわれの浄土真宗では伝統的に一周忌・三回忌・七回忌・十三回忌・十七回忌・二十五回忌・三十三回忌・五十回忌…。とお勤めをさせていただくことになっています。親鸞聖人のご命日のお勤めである報恩講さまが毎年勤まるように先だたれた方のご恩やお徳を偲ぶのであればこれらの年に限ったことではありませんが、仏教の伝統としてこれらの年に改まってお偲びをさせていただきます。

父の場合は先の二十五回忌（この時は母の三回忌でもありました。）から八年経つわけであります。平生は祥月命日以外あまり思い出すこともない父を「そうか、三十三回忌か…」ということで「そういうたらこんなこと言うとったなぁ」とか「あんなことしとったなぁ」とか「タバコ好きやったなぁ」とか「今おったら九十八か！」とか「子どもや孫と冗談言うとったやろなぁ…」とか色々思いをめぐらします。そんな中で、本当に浄土真宗のご法義でよかったなぁと心からそう思います。

なごりをしくおもへども、娑婆の縁尽きて、ちからなくしてをはるときに、かの土へはまゐるべきなり。

『歎異抄』というお聖教に伝えられている親鸞聖人のお言葉であります。

どれ程思いがあってもどれ程思いを募らせても、この娑婆のご縁を結んでゆかなければならなくなる時は必ずやってくる。しかし、それはたんなる死や終わりではなく〈彼の土〉すなわち阿弥陀さまのお浄土へ生まれさせていただく尊いご縁なのですよ。というご法語であります。

往生浄土

往生という阿弥陀さまからの言葉をありがたく思います。この世の“いのち”の終わりは阿弥陀さまのお浄土へ生まれさせていただくご縁である。

親しい人と別れてゆかねばならない寂しさや悲しさは決してなくなりはしないけれども、別れてゆかねばならなくなった人は阿弥陀さまのご本願のおはたらきによって阿弥陀さまのお浄土へ往って、阿弥陀さまと同じお覚りの身と生まれてくださった方であるということであります。

ご法事のご縁を通して色んな思いで、各々のご縁で、一人一人の懐かしさで、あるいは悲しみの、寂しさの中でお偲びをしてゆく先立たれた人は、今の、このままの私を阿弥陀さまと一緒に“私のお念仏さま”となって“願い続け”“護り続け”“育て続け”“支え続けて”くださっているお方なのでありました。

私が、「なんまんだぶ、なんまんだぶ」とお念仏出来ているのも「帰命無量寿如来～」とお勤めできているのも、その元に阿弥陀さまや、ご往生くださった方の私を願い続けるおはたらきがあってくださっているからなのです。

“なんだかあっと云う間やったなあ”と思っている三十二年間、父は（途中からは母と一緒になって）途切れることなく私たちを願い続けてくれておったのであり、これからもそうし続けてくれるのであります。

ご法事という大切なお仏事のご縁は、先だってくださった方を改めてお偲びしお礼を申しあげながらそんな事を味わわせていただくのだなぁと思っています。

合掌